

近畿学校保健学会通信

No.58

昭和62年8月10日発行
近畿学校保健学会事務所
〒640 和歌山市九番丁九
和歌山県立医科大学衛生学教室内
TEL 0734-31-2151(内線324)
振替口座 大阪4-107021番

第34回近畿学校保健学会を終えて

第34回近畿学校保健学会

会長 松岡 勇二

前夜来からの風雨がおさまったく6月20日(日)、和歌山大学を会場として、第34回近畿学校保健学会が開催されました。

遠路、交通の便が悪いにも拘らず、早朝より、多数の会員に御出席いただきまして、心から感謝申し上げます。

午前の一般研究発表は38演題の多数にのぼり、加えて質疑の時間を増やしましたので、先生方の熱意ある討論が行われ、例年にも増して盛り上がったものと確信いたしております。

また、午後の特別講演では、精神科医でマヤ文化の専門家でもある宮西照夫・和歌山大学保健管理センター助教授に、メキシコ・インディオ社会における子供の心の病についてお話をいただきました。マヤ系インディヘナの子供の生活や種々の儀礼を通して、現代社会に生きる子供たちの心の病を、限られた時間ではありましたが、感銘深く伺うことができました。

シンポジウムの「いじめや非行をめぐっての生活指導と学校保健」では、つかみどころのないテーマであり、座長にお願いした猪尾和弘教授には、大変御迷惑をおかけしたものと思います。しかし、このテーマに造詣の深い四人の話題提供に対して、フロアーからは活発な質疑が出され、問題の深さを痛感した次第です。

本学会が盛会のうちに充実したものとなり得ましたのも、偏えに、先生方の御熱意と御支援の賜であり、更には、和歌山県教委・和歌山市教委の御後援と、御協賛いただいた三師会や関係各社、並びに地元評議員の方々の御協力によるものであり、関係者一同深くお礼申し上げます。特に学会幹事長の武田真太郎・和歌山県立医科大学教授には、何かと御指導いただきました。この紙面をお借りして厚く感謝申し上げます。

次回の第35回学会は、京都府で、金井秀子・京都教育大学教授を学会長として開催されます。多くの学校保健関係者が京都大会に御参集いただき、より実りある学会となりますように心から祈念いたします。

目次

第34回近畿学校保健学会を終えて	1
第34回近畿学校保健学会報告	
1. 総会報告	2
2. 一般講演についての座長コメント	4
3. 特別講演	13
4. シンポジウム	13

第34回近畿学校保健学会報告

本年度学会は和歌山地区のお世話により、昭和62年6月20日(土)、学舎統合移転によって装いを新たにした和歌山大学教育学部において開催され、夜来の大雨にもかかわらず、名誉会員1名、正会員122名、当日会員34名が参加して終始熱心に討論がおこなわれ、盛会裡に終了しました。この学会の運営に非常な御尽力をいただいた松岡勇二学長、中 俊博事務局長、加藤 弘事務局次長をはじめ多くの和歌山地区会員の方々に、心からお礼申し上げます。

本年度は昨年度に引きつづき、多数の演題が多くの領域にわたって発表されました。このことは、本学会会員の活発な日頃の学校保健活動と旺盛な研究心の結実によるものだと考えております。

以下、当日の総会の記録ならびに一般講演、特別講演、シンポジウムのそれぞれの座長の先生方のコメントを記して、学会報告にかえます。
(幹事長)

1. 総会記録

1) 学会長挨拶

第34回年次学長の松岡勇二和歌山大学教授が挨拶。

2) 議長選出

林 正 滋賀大学教授が全員の拍手により議長に選出された。

3) 議事

(1) 昭和61年度会務報告

① 会員数 305名 (昭和62年3月末日現在)

② 会議の開催、学会通信の発行など

昭和61年4月21日	第1回幹事会
6月23日	第2回幹事会
6月24日	学会通信 No55 発行
7月20日	滋賀大学において第33回学会総会を開催 (会長 林 正 教授)
9月30日	大阪教育大学から和歌山県立医科大学へ学会事務所移転
11月15日	第3回幹事会
12月15日	学会通信 No56 発行
昭和62年1月10日	近畿学校保健学会役員選出規定検討委員会
3月15日	学会通信 号外 発行

(2) 昭和61年度決算報告

武田幹事長より報告があり、横尾監事の監査報告をうけて承認された (別表1)。

(3) 昭和62年度予算案について

武田幹事長より説明があり承認された (別表2)。

(4) 名誉会員の推举について

本年度は評議員会において名誉会員の推せんがなかったことが武田幹事長より報告された。

(5) 次期（第35回）年次学会開催地および会長について

第35回年次学会は京都地区で開催されることが了承され、学会长を京都教育大学 金井秀子教授にお願いすることになった。

(6) その他

昭和63・64年度学会役員の選出方法について、近畿学校保健学会役員選出規定検討委員会で検討された下記の案が武田幹事長より提出され、承認された。

◎近畿学校保健学会役員選出方法について

昭和63、64年度の本学会役員選出方法は下記による。

1. 現在の幹事は各府県毎に学会活動等を考慮して評議員を推せんする。
2. 学会評議員は各府県毎に幹事若干名を選出する。
3. 幹事会は幹事長を互選し各府県毎に推せんされた評議員を確認する。
4. 評議員の推せん、幹事の選出は改選年の4月15日までに各府県毎におこなう。

(別表1) 近畿学校保健学会 昭和61年度決算報告

(昭和62年3月31日)

収入の部

	昭和61年度予算	昭和61年度決算	増減	摘要
会費収入	690,000	777,000	87,000	会費納入者259名 利息
繰越金	354,565	354,565	0	
雑収入	0	1,198	1,198	
計	1,044,565	1,132,763	88,198	

支出の部

	昭和61年度予算	昭和61年度決算	増減	摘要
印刷費	350,000	314,600	△ 35,400	通信№55,56、号外ほか 滋賀へ支払分
郵送費	120,000	131,185	11,185	
事務費	50,000	54,760	4,760	
人件費	45,000	48,000	3,000	
会議費	50,000	50,550	550	
交通費	20,000	4,720	△ 15,280	
第33回学会費	150,000	150,000	0	
予備費	259,565	0	119,383	
次年度へ繰越	—	378,948		
計	1,044,565	1,132,763	88,198	

会計監査の結果、以上の通り相違ないことを認めます。

昭和62年5月9日

三宅義信
監事 横尾能章

収入の部

	収 入 額	摘 要
会 費 収 入	780,000	260名
繰 越 金	378,948	
雑 収 入	2,000	
計	1,160,948	

支出の部

	支 出 額	摘 要
印 刷 費	350,000	通信No.57、58、59
郵 送 費	140,000	
事 務 費	80,000	事務書類保管用キャビネットを含む
人 件 費	45,000	
会 議 費	50,000	
交 通 費	10,000	
第34回学会費	150,000	前払い済み
予 備 費	335,948	
計	1,160,948	

2. 一般講演についての座長コメント

第1会場

演題番号(101~103)

竹内 宏一

演題101：神経症的不安の強い一登校拒否児の心理療法——治療者の役割および連携のあり方について——：現在、一般の教師が学校保健に大きく期待するのは心の健康特に登校拒否の問題である。本報告は、精神科医が患者の家族調整をすると共に、患者と1対1の人間関係を基盤にした家庭教師的関わりをする一方、担任には治療者としての役割を担ってもらい快方を示しつつある事例の報告である。このように治療的支援と教育的支援の有機的な連携が望まれるところである。その際、本発表では、特に指摘がなかったが養護教諭の役割が大いに期待される。

演題102：病弱・虚弱児教育について——堺市病弱・虚弱児学級を中心として——：学校保健の重要な分野に、心身の障害を持った子ども達に対する課題があり、本報告は病虚弱学級の管理医として10年間活動されたまとめの報告である。病虚弱児教育には、一般的な教育的配慮に加えて、次の4点が重要であると指摘された。①健康管理、②健育教育、③児童の被っている不利、弱点へのカバーや援助、④保護者、主治医との密接な連携さらに、校医および医師会への働きかけの必要性を報告された。本発表でも養護教諭の存在が重要であると感じた。

演題103：学徒における愁訴の本態とその背景：地方都市に住む中学2年生1,400名(男870、女530)について愁訴と生活環境との関係を統計学的に分析した報告である。その結果をみると男と女で異った傾向を示すものがあったが、テレビ視聴時間では似た傾向を示したのは興味深い。即ち、愁訴項目には男女に違いがあるものの、有愁訴群の方が無愁訴群よりもテレビ視聴時間が長かったことである。このことは、生れた時からテレビに手守りをしてもらっている現代の子ども達が、いかに多くの影響をテレビから受けているかの一端を示すものと考えられる。その他興味深い分析も発表された。つぎの発表が期待される。

演題番号 (104~106)

日比野 朔郎

演題104：精神保健の学校教育における位置づけの手掛りと思春期前期の生徒に対する自立への働きかけの手掛りとして「こころの健康チェック」を行った実践的研究で、中学一年生に3年間、矢田部ギルフォード性格検査を実施し、プロフィールの読み方を説明しての保健指導をえたものである。まず「精神保健」という言葉の質問があり、共同研究者・友久(京教大)と武田(和医大)の解説がなされた。研究の着目点の不明確さと良い点のみのまとめとなったようであるとの指摘があったが、研究の積み重ねにより価値ある研究となると信じられる。

演題105：登校拒否が問題となっているこの頃、この対策は早期発見し適切な処置を講ずることであろう。演者らが簡易質問紙を作成して、その質問票の信頼性・妥当性の検討研究であった。レジメにて質問票の概要がつかめられたが、応答率による型分布で登校拒否群と対照群とを比較し発表された。先回には妥当性を中心に検討されている。この質問票はかなり有用であるので、より項目毎間の検討がなされ、早急に普遍化されることを待っているのは私一人だけではない。期待を集めている研究である。

演題106：矯正施設、市内高校と国立大学附属高校(中学生含む)生徒の身体ならびに精神状態を「適応状況調査票」によって実態調査した結果報告であった。調査票は身体症状29項目、精神症状33項目、MMP I の E S (自我強度尺度) 68項目、M A S(不安尺度) 50項目で成立していた。施設児は異常環境にあって適応にはかなりの年月を要すると思われる。またE S と M A S または K D C Lとの峻別、さらに対象校間との検定がなされると一層理解されると考え、共同研究者金井(京教大)の説明を仰いだが、今一つ明確さがえられなかったようである。

演題番号 (107~109)

山本 公弘

演題107：学校医の職務執行をめぐって——校長と学校医の意識についての比較——(松本健治他)：学校医の職務の一部について、学校医と校長の意識にズレがあって、それ違の生ずることは日常体験することであるが、本調査によって、それが裏づけられた。すなわち、児童・生徒の定期又は臨時の健康診断に関する事は、両者の意識がよく一致しているが、学校保健安全計画の立案に参与することは、両者の意識の隔たりが大きいことが示され、今後解決すべき方向が得られた。

演題108 学校保健活動の活性化をめざして（竹田斌郎）：学校保健は、学校職員、教育委員会、三師、保健所、保護者など、広い範囲にわたる構成員の協力によって、成り立つものである。演者は奈良市の単位において、このような構成員による組織を長年にわたって運営してきた実態について発表され、組織づくりの効果について明らかにされた。また、学校職員、教育委員会の人事移動が、組織の円滑な運営を困難にする要因の1つとなっていることも明らかにされた。

演題109：インフルエンザ流行期における「かぎっ子」の欠席状況（馬場春代他）：「かぎっ子」は少少体調が悪くても学校を休むわけにはいかず、無理して登校してくる傾向があると、養護教諭は体験的に感じているという。演者は、「かぎっ子」と「非かぎっ子」、インフルエンザワクチンの接種群と非接種群、計4群について、インフルエンザ流行期における欠席状況を調査して発表された。

演題番号（110～111）

橋 重 美

演題110：この発表は事故発生にあたって、救急した者の立場からのもので、今迄にない特異なもので関心が持たれた。一般的に事故発生の内容とか原因を探るものが多いのに今回のものは救急態勢を見つめるもので興味が懸かれた。

ただ夏休み中であったこと、事例が三件と極めて少ない点で不満足ではあったが、これから救急処置について、ひとつの問題をなげかけたものとして注目される。日頃から救急の手順がちゃんと実施されていたか？ 健康診断が充分に行われていたか？ 又、事故防止対策として主任性の導入はどうか？ こんな場合養護教諭の発言力が弱い傾向にあるなどの質問が活発に行われた。救急態勢が一般に不充分で問題のある点が多いようでこの課題に対する対策が必要である。

演題111：今回の発表は、「医療給付申請書」からみた最近5ヶ年間の学童災害実態のもので、今迄の発表とくらべて特に目をひかれたものは、受験戦争を反映し、中学3年生の災害が激減していることである。又以前と変らず学校内事故発生時間が、第3限から第4限目に入る10時から12時前後に多発の傾向にあることは、学校内により研究を重ねてその対策に努力しなければならないと思われる。尚社会変化の激しさのなかで、安全への懇が見失われているのではといった意見が出された。

学校での安全生活をより充実するため学校は勿論であるが、幼ない時からの家庭内での「安全」の懇が急務とする意見が多い。事故発生が依然学校内で多い点に注目しなければならない。

演題番号（112～113）

金 井 秀 子

演題112：学校における尿検査を通じて、「保健だより」等で医学的知識の普及、ならびに「検尿100%達成運動」を展開し、教師、父兄および生徒に対して、生涯にわたり健康生活を維持するための自己管理の重要性と習慣化について理論的教育と行動化への取り組みのめざましい成果の報告であった。フロアーから検尿受検率を上げることの困難な学校の事例報告もされた。学校保健関係者のチームワークの重要性を示唆するものである。

演題113：大学入学選抜資料となる調査書「健康の状況」における斜線を引く記載方式について、文

章記載の必要性と全高校における統一記載を提起された。全斜線例について個別に検討調査し、明らかな異常所見が認められる例があることを指摘し、斜線引きを廃止し“異常なし”、検査未実施（不明）、判定保留、記載拒否等の文章記載にされるべきである。このことは調査書の信頼性に関わる問題であると言及された。

第2会場

演題番号（201～203）

矢田俊作

演題201：健康観察は常識的なものであり、我々教育活動をしていく上で常に実践していることであるが、本研究はそれを科学的・多角的にしかも一年間継続して観察しているところに価値があるのではないか。笠松（鳴戸教育大）から提案資料の2と3を統合してエレメント的なものを構造的に進める方がよいのではないか、又、運動クラブとしての技術的なものや生理的（人間的）なものとの両面をあわせ考えるのも意義があるのでないかと助言があった。

演題202：小学校・中学校・高校ではどう変るのか、即ち、発達の特性とどう結びつけて考えればよいのか。特に小学生という発達段階にある子どもは、出来なかった運動に挑戦努力して「やれた」「やった」と歓声をあげるところに“快”的感情が生まれるのではないだろうか、といった疑問に対し、演者の方から、学習するという事とは別の次元だと考えている。筋肉の異和感に対し立ち向っていくのではなく、不快な動きを発見し、それを快の動きに変換することにより、快感を得るために動きであるという意味の発言があった。「操体法」は快的で健康的な生活をしていく上での健康づくりであると理解することができよう。

演題203：私自身「操体法」にはじめて出合った。近年戸外で仲間と群をなして体をはった遊びがなくなりつつある子どもの実態をみると、脊柱側彎症であるとか、視力異常・成人病の低年齢化等々の問題が子どもの生活の中に起きてきている。こうした現実のなかで、本日2題にわたって「操体法」の研究発表を拝聴し勉強できた事に感謝すると共に、「生涯体育」という言葉があるが「生涯健康法」の一環として今後「操体法」を研究していく価値があるものと考える。

演題番号（204～206）

上延富久治

演題204：ワゴンに照度計を取り付けた自作の装置を考案し、奈良市某中学校の体育館にて、各測定点の照度を測定し、その結果を、JIS規格の最低基準である200ルックスに対する割合に応じて、方眼紙上に明るさを白ぬきにし、暗さを黒ぬりにして、その問題点を視覚的にイメージ表現し、より関心を持たせようとした。その検査結果から、現行の学校における照度に関する検査基準よりも、照明の必要な時間帯や天候時などの悪条件下に測定する方が理にかなっていると訴えている。

また、照度に限らず、学校環境衛生全般についての検査結果を、誰もが理解しやすい表現法に工夫し、関係各位の連携活動をより密にすることにより、その改善策を講じていくことの必要性を提げた

発表である。

演題205：児童の耐暑能を増進させるための基礎資料として、児童の体温調節の特性を成人との比較において検討したものである。すなわち、湿度70%で、環境温が60分間に25~40°Cに直線的に上昇する条件下に被験者をおき、それらの直腸温、皮膚温、発汗量および代謝量を測定した。その結果、児童では発汗反射が早く、体重当たりの総発汗量も多く、また平均皮膚温の上昇も速やかに現われたとのことである。従って児童の暑気感受性は高く、その放熱作用は皮膚温反応に依存する面が大であると推定している。

思うに、ホメオスタティックなレスポンスをふまえて、確信の持てる基礎データとして充分検討したものであれば、単に今回の研究対象のみならず、肥満とやせ、運動選手と一般人等、種々の側面からの比較検討に応用出来る内容として有用であろう。

演題206：肥満体質者に少くない脂肪肝の低年齢化が進んでいる現状をふまえ、大学の柔道部員とスキーパーク（但し女性を含む）を比較対照とし、超音波による肝エコーグラムによる脂肪肝の判定を肥満度との関連において考察したものである。その解析には、腎／肝コントラスト、肝実質のブライトネス、肝の変形度の3項目について比較検討している。

その結果、今回は血液所見等は省略しているが、肥満度の高い柔道部員では脂肪肝に特徴的な各項目の陽性所見が高頻度にみられたことから、肝に可成りの脂肪沈着が存在すると推定している。従って彼らのライフ・スタイルやトレーニングのあり方等については充分考慮する必要があると注意を喚起している。なお、共同研究者の朝井から今回の研究意義等について追加がなされた。

演題番号 (207~209)

後 藤 英 二

演題207：からだの自己観察(Watch Your Body)を保健教育に活用する試み(その2)——中学校の保健授業への応用——：生きた保健授業を行うということは大変難しい問題である。特に、自己存在感が希薄になった最近の子ども達に対しては、まず、からだの自己観察を通して、自分のからだや健康に興味を持たせることができ第一である。このことに基づき、実感的ないしは体得的な科学的認識を中心に考えた保健授業を行おうとする目的で、女子中学生を対象に血液循環について行った授業をもとに作成した授業原案の報告であった。授業に対しては、ほとんどの生徒が興味を示し、意義を認めていたとのことであり、今後、更に継続して行われることを希望する。

演題208：保健科教育にみる教科内容の現代化についての検討：急速な社会の変化に伴い、保健科内容がどのようにその時代の社会的要求に応えていくべきかについて検討したものである。従来に企てられた教科内容の現代化では、改革方向よりも具体策に問題があり、更に、改革の進め方に問題があったために実践レベルにまで反映されなかったと指摘し、今後の改革では、教育現場の豊富な実践と具体策の展開を踏まえて進めていくべきであるとの発表であった。現在の保健科教育では、時間的な要因が大きな障害となっているため、この問題を考慮した検討の必要があると考えられる。

演題209：保健教育の履修内容に関する検討：教員養成系学部、大学における保健教育の力量形成に必要な履修内容を検討する目的で行われた。教師並びに保護者を対象とした保健教育に関する20項

目の質問紙調査を分析したものであった。各質問項目の百分率比較では、教師と保護者の立場の違いが明確に現れ、又、数量化理論III類によるパターン分類の検討では、保健教育の必要とする履修内容を3群に分けて考えることができたとの報告であった。なお、「あらかじめ特性の違うグループを数量化理論III類を用いて分析するのは適切でない」との意見が出されたが、保健教育の履修内容に関する検討という観点から見れば、教師も保護者も立場的には同じ保健関係者であると考えるため、特性の相違を強調する必要はないと思われる。

演題番号（210～211）

美崎教正

演題210：児童の健康生活に関する研究(1)：この研究は小学生児童の体の発育・発達と運動・健康生活の相関についての一連の研究の第一報である。この調査で明らかにされたことは「小学校児童の運動の好き嫌いの傾向である。他方、運動の嗜好と体型の関係についてHEATH CARTER の体型分類表により、解析しているが、次のような問題点が指摘された。(1)小学校児童（1年～6年）を対象としたアンケート結果の信頼性に問題はないか。(2)変化の大きい児童について、その発育・発達を評価するのに、対象の小学生全員を一括して集計することの意味と問題点について。(3) HEATH CARTER の体型分類表の学校保健分野での市民権について。(4)学校の体育以外に習っている運動が児童の体型に影響を与えない理由。(5)児童の体型を決定する多くの因子の中で、運動嗜好がどの程度ウェイトを占めるのか。

以上の点より、児童の発育・発達を左右する因子として、運動嗜好のみをとらえて、しかも小学校低学年の生徒へのアンケートによるデータで評価する事に疑問が寄せられ、体型評価には、多変量解析の必要性があることを指摘された発表であった。今後の多角的な体型変容因子についての検討を期待するものである。

演題211：健康に関する中学生の認識——主として生活行動の動機からの検討——：この研究は、中学校における保健教育の向上に向けて中学生自身が、その健康水準とそれへの生活行動の影響について認識しているか否かを検討するため、736名の中学生を対象にアンケート調査を行ったものである。

特に、このアンケートでは、中学生の健康意識に関する実態を明らかにするため、記名式で自由記述式のアンケート法を採用したことは、このデータの信頼性を高めている半面、認識度判定段階において、主観的判断の入る余地を残したことにもなる。これらの特徴を踏まえた上で、実態調査の結果、一般的の中学生は、健康状態に関わる生活行動の認識度は低く、中でも、精神的側面、社会的側面において特に低い。また、疾病経験群（20日以上、入院または通院を経験した生徒群）と非経験群との間には、この認識の度合に大差を認めなかったことは、「病気をして、始めて健康の有難さを知る」という一般的認識からみれば、疾病経験を生かした生活行動への認識が得られていなかったことについての何等かの説明が必要だろう。

以上の点から、現在の生徒が、自らの健康水準を主体的に高めるために生活行動を駆使する力が不十分であることを示唆するものであり、このことは、健康教育上一つの大きな課題を提示したものといえる。

演題番号（212～213）

森 忠 繁

演題212：幼児の体格、体力に適した体育カリキュラムの編成のために、その地域あるいは園の幼児の体格、体力を知る必要があるだろう。本講演はある園における10年間の園児の体格、体力の測定から5段階法による基準の試みがなされた。年長群および年少群それぞれの身長、体重、座高、胸囲などの体格および25m走、立幅とび、体支持持続時間など運動能力に10年間に著しい差が認められなかった。従って、10年間の測定値を6ヶ月間隔の歴年齢別に算出して基準が作成された。作成された基準が体育カリキュラムにいかに適用されるかについては今後の検討課題であろう。

演題213：妊娠の運動は胎児の出生時体重が平均より少し小さく、分娩が軽いことは経験的に知られており、近年は水泳やジョギングなど運動をとり入れた妊娠管理が行われている。本講演は妊娠中の運動が出生児の発育、発達に与える影響についての動物実験による基礎的研究である。妊娠マウスM群（妊娠10～13日）、S群（妊娠10～17日）に1.0～1.5gの体重減少を来たすような運動を負荷し、新生仔マウスの発育、反射機能、学習能力をC群（対照）と比較された。各群の標本数は4母体、新生仔マウス34～40匹であった。出生時体重はS群、M群が小さかったが、S群、M群の体重増加が大きかった。離乳期前の前進運動、水泳、音響驚愕反応の出現は、S群、M群が早かった。open field test、水迷路テスト、回避テストも運動群新生仔の成績がよかつた。

第3会場

演題番号（301～303）

林 正

演題301：5～24歳の児童・生徒・学生を対象として、最高可聴閾と眼の調節力の年齢的分布を10、25、50、75、90%ile値を求めて基準曲線を作成して検討したものである。男女とも加齢とともにゆるやかに低下し、最高可聴閾では17～18歳を越えると低下傾向がゆるやかであるとの報告であった。実用性を考慮した有用な検討である。各年齢の最高可聴閾の女子の分布は男子より若干高いように思われるが、その理由が何かあるのであれば教えてほしいとの質問が座長よりあったが、特別には考えていないとのことであった。

演題302：阪神地区の公立高校2校に在籍する高3女子の1964年の資料をretrospectiveに小1まで調査した縦断的資料によって、下肢長（身長－座高）の発育曲線における最大発育年齢の分布と身長、座高の最大発育年齢の分布を比較検討したものである。下肢長の最大発育年齢は最も早く(10.52歳)、次いで身長(10.72歳)、座高(10.99歳)であった。又、最大発育年齢の発現順序は下肢長<身長<座高の場合が最も多く(63.4%)、最大発育年齢の累積度数分布から%ile値を求めるとき、50%ile値は下肢長10.49歳、身長10.93歳、座高11.70歳であり、これらを用いての発育曲線と年間増加量の年齢的推移が報告された。

身長、座高の測定値は健康診断時に測定されているので、中3以上高校生等の保健学習における身体発育の学習等で大いに利用し、養護教諭からの資料提供とあわせて、合理的な利用が必要と思われる。

演題303：高校1～3年の男子163名、女子166名を対象にして、cybex IIを用いての等速性運動による脚筋力を測定し、脚筋力と体力、運動能力テストとの相関関係を検討したものである。脚筋力と踏み台昇降、持久走、立位体前屈等の相関は認められなかったが、握力、ボール投げ、垂直とび、背筋力、走り幅とび、50m走等で高い相関関係を示したとの報告であった。

座長より、脚筋力と最も高い相関を示す種目並びに相関係数の絶対値について質問したところ、背筋力であり0.8くらいの相関であるとの解答があった。運動クラブに所属している者と所属していない者との比較等があればなお興味深い。

演題番号（304～306）

大山良徳

このセクションでは、パソコンが学校に設置・普及していく段階で、パソコンを学校保健の統計のみならず児童・生徒個人の発育発達の資料づくりと、教職員の健康診断資料づくりに役立てるための新しいプログラムの開発と、その成果について報告された。

長谷川氏(304、パソコンを利用した児童生徒の体格に関する保健資料の発行)は、手作業では困難な体格に関する資料を、全児童について個人別にリストアップし、子どもの発育発達過程の考察と保健指導に役立てており、児童本人はもとより、学級担任、保護者の好評をえていることを報告した。とりわけ、早期の肥満対策資料づくりは、本人に強く印象づける点で教育効果は大きいと考えられる。

田中氏(305、パソコンを利用した保健室からの卒業記念シートの発行)の研究は、生徒一人一人について、幼稚園から高校生に至るまでの心身の発育発達過程を、男女別の人形絵画によって表示する方法を考案したところにオリジナリティがあるといえよう。まさしくこれは、個人の生育史であり、児童生徒との対話法の一つとして意義あるものと考えられる。このことは、子どもたち本人の反響の大きさはもとより、教師、保護者の関心を高めたことからもうかがい知ることができる。

横尾氏(306、パソコンを利用した体格と血圧推移に関する教職員向通知票の発行)は、教職員の定期健康診断結果を年次ごとにプールし、パソコンで図式化して個人の健康意識を、さらに高めるための資料づくりのプログラム開発に成功したことを報告した。この点で、本研究のオリジナリティは高い。しかし、個人の異常値を公表することのプライバシーについて質疑がなされた。これに対し、演者は通知希望者にのみ通知票を発行するようにしているので直接問題はないが、当然ながらこの点に関しては、慎重に取扱う考え方のあることを示唆した。ともかく、過去のデータと現在のそれとを比較できる点で、意義ある通知法といえよう。

演題番号（307～309）

山城正之

有居奈保美氏（神戸市教育工学研究会）らの〈307〉は、四測データを文豪15Dを用いて簡便に処理する操作手引書を作成したものである。肥満児童抽出も行なっているが、15Dの容量から1学年5クラス用のモデル展開を行っている。

川畠愛義氏（日本生活医研）らの〈308〉は、医食を同次元において同義にとらえる「医食同元」という考え方を、「医食同源」を超えて提唱したもので、栄養指導の観点に資したいとするものであった。

平野登志子氏（華頂短大）らの〈309〉は、すべての食品を42種類に要約、栄養換算表を試作し、その妥当性等の吟味を「ひょう量法」を対照として行ない、その結果を報告した。この栄養換算表作成における荷重平均の処理をそのまま利用したポケットコンピューターのプログラムをつくっている。

ワープロの表計算機能の活用技法、栄養指導の観点、栄養測定方法の吟味と調査、の3題であった。

演題番号（310～312）

左海伸夫

3題とも北葛城郡学校給食栄養研究会からの「子どもの食生活」について調査研究されたもので、まず、小川千賀子氏らは「小・中学生における子どもの食生活について」と題し報告された。朝食摂取状況、摂取食品や量、夜食の有無、運動量などについて調査され、小学生に比べ中学生に肥満意識が強いが実際の肥満者は少ない傾向にあったとした。しかし種々の調査結果との間での分析が詳しくなされておらず今後の研究に待ちたい。

演題311は、白井京子氏らにより夕食開始時刻と食生活の関連についての分析結果が報告され、結果として夕食開始時間が20時～21時以降と遅い群では朝食を食べない子どもが半数以上あり、これらの子どもたちに対して、夕食開始時間の遅い理由が両親の共稼ぎや子どもの塾通いなどが考えられるとしても、健康、栄養の面からどのように指導すべきかという問題提起がなされたが、これに対する結論的意見はでなかった。

演題312は、黒江絹子氏らによって「肥満度別に観察した子供の食生活」についての調査結果が報告され、子どもたちの肥満に対する意識は高いが実際の肥満者は案外少なく、しかも、それをお菓子などの摂取は控えている傾向が見られること、また、運動不足であるという意識を持っている子どもが多いことなど、子どもたちの意識と健康教育とをどう結びつけていくかが今後の課題であると結んだ。今後、摂取食品の種類や摂取量、排便状況、また、運動の質と量などと肥満との関係についての調査分析がなされることを期待したい。

3. 特別講演

宮西照夫：

“メキシコ・インディオ社会における子供の心の病”のまとめ

座長 松岡 勇二

学生時代に読んだD·H·ローレンスの短編小説「馬で去った女」が、マヤ学に取りつかれるきっかけになったという演者は、その後、グアテマラなどの中米諸国に10数回も入り、貴重な調査をコツコツと続けてきた。

今回の特別講演では、まず現地の人たちの生活をスライドで示されたあと、子供から大人へのいろいろな通過儀礼（誕生にまつわる儀礼、靈魂の身体への結合を強化する儀式、養父の儀式、結婚式など）が紹介された。そのなかで、演者が養父になることを依頼され、正式な名前をつける名付け親など）が紹介された。そのなかで、演者が養父になることを依頼され、正式な名前をつける名付け親など）が紹介された。そのなかで、演者が養父になることを依頼され、正式な名前をつける名付け親など）が紹介された。

なったということは、如何に演者自身が尊敬されているかを物語るものとして興味をそそった。
これらの通過儀礼をみると、現在の日本は通過儀礼喪失の時代ではないか？ 私たちが近代化とともに失いつつあるものは、その基盤にある不可視空間の存在ではないか？ そのような結果から、子供たちの成長過程において、様々な歪みが生じるのであると結ばれた。

4. シンポジウム

“生活指導と学校保健——いじめや非行をめぐって——”

の座長のまとめと感想

座長 猪尾 和弘

今回のシンポジウムで採り上げようとしたのは、いじめや非行の予防・発見・是正のために生活指導の中で学校保健業務担当者が果し得る役割はどのようなものであるかというテーマであった。以下、講演いただいた順にシンポジストの基調を要約し、若干の感想をつけ加える。

大阪市立の小学校、養護教諭、新谷萬理子さんは、いじめの実態調査の結果、その形式の多様さと形態の陰湿化を事例にて説明した後に、いじめ克服のためには多角的な学習・活動方式と共に、早期発見12ポイントを提示した。学校保健担当者にとっては、他人を思いやる心の土壤をつちかうのが予防・是正のための本質的な目標であると述べた。

和歌山県、御坊市の中学校教諭、直川 豊氏は、荒れ狂った中学校の修正を目指して続けられた教諭達の実体験を語り、非行生徒の指導は、外観や言葉遣いにとらわれず、心の通じ合いを得ることが大前提であると強調した。また、養護教諭は、平素の傷病手当を通して、或いは、話し相手となつて他の教諭とは別な接し方で有用な情報・手立てを供して生活指導に大きく寄与した点を指摘した。

和歌山県下、粉河の高校教諭、辰堀 貢氏は、豊富な事例、体験をユーモラスに紹介されたが、問題

生徒を観る要領と対応策に、経験者ならではの確かな結論を示した。特に、心気症と保健担当業務の接点に言及したのは印象深かった。

鳴門教育大学の中塚教授は、非行やいじめの是正をはかる心理学的な指導目標の有り方を提示した。即ち、許容性・包容力の養成、支配欲・指揮権力欲の抑制・弱者を支える扶助精神のはぐくみ、さらには、個体能力主義・サーバイバル思想を軽減して、集団社会を楽しくするための調育等は、遠くに見えていたが、動かしてはならない目標であるとした。

講演後の討論に於ては、遊べる広さや空間に恵まれぬ鍵っ子の不幸が、非行やいじめを呼ぶこと、いじめや非行は我々を悩ませるが、これ等は自由主義社会に共通の病理現象であり、矯正のために國家統制や宗教戒律の介入は許し難いという論旨も述べられた。最後に、生徒の心のはぐくみには、養護教諭のみが果せる特異な役割があると信じるが故に、この身分を生活指導の主幹とみなして定員増加を検討する時勢に入ったとする発言があり、その心意気に共感をおぼえた次第である。

総じて、生徒の心情を的確に見ぬき、保護・激励・説得・連絡通報等々保健担当者の実務に大きな広がりのあることを認識させられた。

第35回近畿学校保健学会の予告

会長	京都教育大学 金井秀子 教授
会期	昭和63年6月12日(日)の予定
会場	京都教育大学 学舎

《日本学校保健学会の案内》

下記のとおり開催されますので、近畿学校保健学会同様積極的に御参加下さい。

◎第34回日本学校保健学会

会長	伊藤二郎
会期	昭和62年10月10日(土・祝日)・11日(日)
会場	静岡市民文化会館(〒420 静岡市駿府町2-90) 静岡県総合社会福祉会館(〒420 静岡市駿府町1-70)
学会事務局	〒422 静岡市大谷836 静岡大学教育学部保健体育科内 第34回日本学校保健学会事務局(電)0542-37-1111(代)

◎第35回日本学校保健学会

会長	武田真太郎
会期	昭和63年10月8日(土)・9日(日)
会場	和歌山市内
学会事務局	〒640 和歌山市九番丁九 第35回日本学校保健学会事務局 和歌山県立医科大学衛生学教室内(電)0734-31-2151

昭和62年度会費納入について

第28回近畿学校保健学会総会において学会会則が改正され、昭和57年度より会員制が明確に打ち出されております。したがって、年会費を納入されないと、翌年度から学会通信その他の案内が送られなくなります。

昭和61・62年度会費(各3,000円)が未納の会員の方は、至急同封の振替用紙を使って、学会事務所まで納入されますようお願いします。